

## むらの伝統文化顕彰 - 農林水産大臣賞

タイトル：「<sup>ひとやまのうそんかぶき</sup>肥土山農村歌舞伎」

応募団体名：<sup>ひとやまのうそんかぶきほぞんかい</sup>肥土山農村歌舞伎保存会

市町村名：<sup>かがわけんしょうずくんとのしょうちょう</sup>香川県小豆郡土庄町

### 活動の概要

貞享3年(1683年)庄屋太田伊左衛門典徳が、私財を投じて築造した灌漑用ため池(蛙子池)が完成し、その水が伝法川を伝わり、肥土山離宮八幡神社の境内へ流れてきたことを祝って、当時の村人が仮小屋を建てて芝居をしたのが始まりと言われている。

肥土山歌舞伎は、蛙子池の水神祭や離宮八幡神社例祭の奉納歌舞伎として、また祝事や農閑期の娯楽として上演されてきた。役者の高齢化と後継者不足で定期公演に苦慮する時代を経験。その後、昭和42年に歌舞伎後援会を結成、その後、昭和61年に現在の保存会の名称に改め再結成し、後継者育成及び、舞台・衣装・道具類の保存管理を行っている。

平成8年には、青年部会を後継者育成会として立ち上げ、現在43名の会員が役者・下座音楽・義太夫・大道具・化粧・床山部会の中で、年間を通して定期的(月2回程度)に技術の習得・伝承に取り組んでいる。現存する舞台は、明治33年(1900年)に改築されたもので、間口17.10m、奥行8.82mの寄棟造りで、大屋根は茅葺き、本瓦葺き下屋付で島内舞台の代表的な建物で、平成20年には地元民による茅葺き大屋根の改修を行う予定となっている。

肥土山歌舞伎には、肥土山地区内の全戸・全住民(約230戸、約800人)が歌舞伎公演に参画している。地区内6組が1年輪番制によって定期公演の準備から運営を行うことで、各地区の競争意識を生み、運営活動が活発化したことが継続の大きな要因になっている。

また子ども歌舞伎は、少子化に伴い地元小学校が廃校になり、学業との兼ね合いにより、小学生高学年(4~6年生)全員を対象に、1月~5月の三ヶ月間、奉納歌舞伎公演を目標に稽古を行っている。

### 講評(評価のポイント)

農作物の生育に欠かせない灌漑用ため池の完成に端を発している肥土山農村歌舞伎は、その当時のむらの喜びを今日まで伝えるものが感じられる。人口約800人の中で、芝居の継承、舞台や衣装の維持など体系的に活動を行っており、儀式的にも技術的にも高い水準を維持している。特に、後継者育成については、それぞれで会をつくり、現在43名の後継者が育っているということは、大きな成果といえる。後継者不足・少子高齢化により、地域の伝統文化の継承が危ぶまれる中、安定的に体系的に農村歌舞伎の保存・伝承をしている点を特に高く評価した。

## むらの伝統文化顕彰 - 農林水産省農村振興局長賞

タイトル：「<sup>ほっかいどうわしゅば</sup>北海道和種馬<sup>だんづけぎじゅつ</sup>による駄載技術」

応募団体名：<sup>はこだて</sup>函館<sup>ほぞんかい</sup>だんづけ保存会

市町村名：<sup>ほっかいどうはこだてし</sup>北海道函館市

### 活動の概要

日本では平安時代頃から駄馬を使用するようになり、江戸時代に京都と江戸の間に宿駅制度が設けられ、伝馬制度を整備し、各宿場では馬を常用して書状や荷物を送るのに活用した。その後は、主要な街道にも次々つくられ、馬は庶民の暮らしに深く関わるようになり、西は牛、東は馬が主であった乗用や駄載（駄賃づけ）も、次第に全国的に馬が使用されるようになった。

これらの子孫は現在8種類が日本在来馬（\*）として残るのみで、その一種が北海道和種馬（ドサンコ）であり、最近まで北海道の産業や生活に深く関わってきたが、自動車の時代になり、馬の仕事は減少。車では困難なところに駄載の仕事があったが、それもヘリコプターに代わり、古来の駄載技術や駄鞍などの用具も忘れられ、また駄載運搬の熟練した人の技術も少なくなっていく。

函館だんづけ保存会では、蝦夷交易や道路不備の蝦夷地への生活物資運搬、人の移動手段などの重要な役割を果たしたドサンコによる駄載技術や馬の用具、馬文化の全体を後世に残したいと、平成17年に発足。自らの技術の習熟継承に努力するとともに、馬の全道共進会等で駄載実演を行い、馬文化の保存・継承活動を行っている。

以前は本州方面で古く伝えられてきた技術であるが、今は、駄載の仕事や使用する馬もいなくなり、馬・技術ともに保存され今日に至るのは函館方面のみである。ドサンコも平成16年に北海道の馬文化として「北海道遺産」に指定されている。

\*日本在来馬

北海道和種（北海道）、木曾馬（長野県木曾、岐阜県飛騨）、御崎馬（宮崎県串間市）、対馬馬（長崎県対馬）、野間馬（愛媛県今治市野間）、トカラ馬（鹿児島県トカラ列島）、宮古馬（沖縄県宮古島）、与那国馬（沖縄県与那国島）

### 講評（評価のポイント）

北海道和種馬という種の保存だけでなく、北海道の開拓を支えた「駄載」技術や馬道具とともにそれらを全体として地域の文化遺産と捉え、実践的な活動で保存・伝承を行っている。運搬での活躍の場がない現在では、今後の技術伝承は困難が予想されるが、今、ここで保存・継承を行わなければ消えてしまう文化であり、北海道独特の伝統文化であることから、この活動を高く評価した。

## むらの伝統文化顕彰 - 農林水産省農村振興局長賞

タイトル：「<sup>なえとりうた</sup>「苗取り唄・<sup>たうえうた</sup>田植唄・<sup>なすいねかりうた</sup>那須稲刈唄」<sup>でんしょう</sup>の伝承」

応募団体名：<sup>なすなえと</sup>那須苗取り<sup>たうえうたほぞんかい</sup>田植唄保存会

市町村名：<sup>とちぎけん</sup>栃木県<sup>なすしおぼらし</sup>那須塩原市

### 活動の概要

明治政府の殖産及び華土族授産計画により那須野ヶ原に入植した開拓者が、当時石ころだらけの大地に水を引く構想を立て、明治 18 年 9 月 15 日に、日本三大疏水と言われる那須疏水を完成させた。これで長い水不足との戦いは幕を閉じ、那須野の人々は歓喜し、米づくりに励んだ。こうして昭和 30 年代まで続く馬と手作業による農作業の中で生まれ、歌い続けられたのが「苗取り唄・田植唄・那須稲刈唄」である。

しかし、農業の機械化とともに、昔ながらの農作業の風景は姿を消し、誰もが歌うことの出来た唄も現在では知る人が少なくなっている。また共同作業であった田植えや稲刈りは、機械化や混住化により個人の作業になり、地域の関係は希薄になって、地元の子供達にとって、先人が苦勞して開拓した田んぼや農業は身近なものではなくなってきている。

那須苗取り田植唄保存会は、昭和 30 年代まで続いた馬と手作業による田植えの姿や、作業中に歌われていた「苗取り唄・田植唄・那須稲刈唄」を後世に残すため、平成 4 年に 14 名で発足。翌年には、町の文化協会に入会し、毎回 10 人ほどの特別参加の子供達（幼稚園性～6年生まで）と共に各種イベントに参加するほか、老人ホームの慰問などを行っている。

また、子供達に食の大切さを伝え、歴史的な伝統文化の保存に貢献するため、かつての田植えの姿を復元し、年間を通じて農作業体験を行っている。

平成 15 年度からは、水土里ネット那須野ヶ原が推進本部となり、「田んぼの学校の学校」～米づくり自然親子・体験塾～として正式に立ち上げている。

### 講評（評価のポイント）

苗取り唄・田植唄・那須稲刈唄を継承するため、春から秋へと続く昔ながらの農作業の姿を復活し、子供達へ農作業体験を実施している。こうした活動に加え、水辺環境体験支援事業の実践フィールドに指定されるなど地域への広がりがあり、先人が苦勞し開拓した那須野の農の景観保全にも繋がっている。こうした農作業体験や唄の伝承が学校や子供達の生活と連動して行われている点を高く評価した。

## むらの伝統文化顕彰 - (財)都市農山漁村交流活性化機構理事長賞

タイトル：「<sup>てびやま</sup>手火山」

応募団体名：特定非営利活動法人<sup>とくていひえいりかつどうほうじん てびやま</sup>手火山

市町村名：<sup>しずおかけんおまえざきし</sup>静岡県御前崎市

### 活動の概要

手火山とは、焙乾（直火による燻し）という鰹節作りで、自分の勘と経験によって、薪の種類、薪の焚き方、時間、空気量、燻臭、湿度、色などを見極めながら、総合的に調整して作り上げるものである。機械を使わず、電気も使わないことも大きな特徴である。

江戸時代に、みかんの肥料となるカツオの荒粕を船に積み紀州へ売りに行く途中に出会った、鰹節の優れた技術を持つ土佐の鰹節職人、山際初次郎を御前崎に招き、当時最新の鰹節の製造方法だった「手火山」という焙煎方法を伝授してもらうことから始まる。

以来、改善を加えながら、手火山方式による鰹節作りが町の基幹産業となり、昭和25年頃には、鰹節製造業者は50軒にもなっていた。

しかし昭和35年頃から時代の流れが大量生産、工業化、効率化に変わり、手火山方式はこの流れに対応できず、現在は2軒を残すのみで、当事者も高齢となり、後継者も決まらないまま、手火山方式の存続が危ぶまれている状況であった。

特定非営利活動法人手火山は、地元有志が集まり、手火山方式の技術の継承を中心に、地域の水産業の発展とブルーツーリズムの実施し、これをまちおこし、地域の活性化につなげることを目的に、3年間の準備期間を経て、平成19年に設立。手火山を使った工場での体験学習の実施、手火山の技術の継承と施設の保存等を目指し活動を行っている。

今後は、NPO 会員、または一般に広く呼びかけ、現在、手火山を経営する2人から技術を伝授し、後継者養成を行うこととしている。

### 講評（評価のポイント）

土佐の職人から持ち込まれ、一時は町の基幹産業だった手火山方式の鰹節作りを、地域特有の資源として捉え、単に保存・伝承するだけでなく、体験学習やブルーツーリズムへの発展など、実践的・経済的活動につなげて、多角的に地域の活性化を図ろうとしている点が評価された。まだ活動期間は短いですが、焙乾による鰹節作りの技術は、全国的にも減少しており、ここでの保存・伝承は今後、非常に重要であるという点から、高く評価した。

## むらの伝統文化顕彰 - (財)都市農山漁村交流活性化機構理事長賞

タイトル：「<sup>まち</sup>町じゅうの<sup>みんな</sup>皆で<sup>まも</sup>守る「<sup>たからもの</sup>宝物」(「<sup>はなまつり</sup>花祭り」)」

応募団体名：<sup>とうえいちょう</sup>東栄町 1 1 <sup>はなまつりほぞんかい</sup>花祭り保存会

市町村名：<sup>あいちけんきたしたらくんとうえいちょう</sup>愛知県北設楽郡東栄町

### 活動の概要

奥三河に伝わる「花祭り」は、祭場に八百万の神を呼び招き、酒食を献じ、舞いを奉納して祈りを捧げるもので、約700年の歴史をもっている。古くは旧暦霜月の寒い季節の祭りで「真冬となって太陽が力を失い、世の中がもっとも精気をなくすこの時期に、大地の精霊を呼び起こし、祭祀の法力によって万物の再生を祈る」という精神が宿っているとされる。

江戸期には、町内11カ所で行われ、祭りの拡大のピークを迎え、明治期に始まった1地区を加え、12の集落で行っていたが、戦後まもなく廃村により1地区途絶えたが、他の11地区は変化する社会情勢や過疎化の波に負けず、それぞれの保存会に見合う内容に、花祭りの形を変化させながら現在まで継承している。

その中で下栗代花祭り保存会では、元来は長男が祭りを守っていたがそれをやめ、次男や三男たちに協力を要請。若い頃から祭りの担い手になり、所帯を持つと、その子どもが舞手になっていくなど、後継者育成を広く行っている。

また河内と中在家の2保存会では、保存会の範囲を拡げて継承している。特に河内保存会は、約40年前に旧来の集落では祭りが存続出来なくなり、15年にわたり中断してきたが、組織の広域化を考え、近隣集落をふくめて旧来の約4倍近い人数で再開に至っている。

御園花祭り保存会では、15年ほど前から東京都東久留米市の住民と連携し、御園と東京で花祭りを開催。また、東園目保存会は、小学校の廃校跡にきたプロの和太鼓団のメンバーを保存会員とし、和太鼓集団との技術と人的交流を行うなど、各地区が知恵と工夫で「花祭り」の保存・継承に努力している。

### 講評（評価のポイント）

少子・高齢化が進む中、「花祭り」を後世に伝えたいと、それぞれの保存会が知恵を出し工夫して、保存・継承のあり方に地区ごとの多様性を認めつつ、包括的な視点にたって祭りの継承活動を行っている。その取り組みを行う中で、多様な主体との出会いに繋がりが、都市農村交流に展開しており、こうした文化伝承の形は全国的な教訓になるという点を高く評価した。

## むらの伝統文化顕彰 - (財)都市農山漁村交流活性化機構理事長賞

タイトル：「<sup>おきしま</sup>沖島の<sup>さぎちょう</sup>左義長」

応募団体名：<sup>おきしまちょうじちかい</sup>沖島町自治会

市町村名：<sup>しがけんおうみはちまんし</sup>滋賀県近江八幡市

### 活動の概要

沖島は、琵琶湖最大の島で、湖の島に人が住む例は世界でも少なく、日本では沖島のみである。人口は約500人で、周辺を取り巻く自然環境や生業の形から独特の風土が生まれ、周辺農村地帯とは異なる文化を育ててきている。

その一つに、毎年成人の日の前後に「サンチョウ」と呼ばれる、市内でも最大規模を誇る巨大な作り物を製作して燃やす小正月行事があり、近江八幡市の他地域も同様に行われるものであるが、沖島ではもう一つ別の意味が込められている点が特徴的である。

沖島のサンチョウ行事は、数え年15歳～25歳までの男子で構成される青年団が主体となって行われるもので、島に生まれた男子はこの青年団に入るのが昔からの習わしである。数え年15歳の少年達は、「ゲンブク」と呼ばれ、この時から青年団の一員として一人前として扱われるが、同時に最も厳しい試練を与えられる。

行事の当日、ゲンブクの少年達は、奥津島神社の裏手の山から各自一本ずつ、自分の担ぐ御幣の本体となる松の枝を切り出してくる。青年団長を先頭に、揃いの作務衣様の着物を着たゲンブクの少年達が頭上に五色の御幣用の短冊をいっぱい担いで従い、その後方には、大漁旗や鉦などを持った青年団が囃し立てながらやってくる。

神社に到着し、本殿に拝礼した後、サンチョウに奉火する火の付いた提灯をもった団長とゲンブク達で、スクラムを組んだ青年団員達に突進しながら石段を下りると、今度は青年団員達にサンチョウへ火を放とうとする火を消されてしまう。そのうち島の大人達も加わり格闘の結果、火が付けられると巨大な火柱となっていく。こうしたサンチョウの試練をくぐり抜けた仲間の絆は固く、愛郷心を育てる行事になっている。

### 講評（評価のポイント）

琵琶湖に浮かぶ島の中という独特の立地条件の中で、若者を中心に、しっかりと伝統行事が継承されている。「サンチョウ」の大きさもさることながら、住民みなで若者を育て、見守っていこうという儀式は同世代の仲間をつくり、地域への愛着心を育てることに繋がり、地域の担い手づくりの行事となっている点が重要である。今後の農村伝統行事伝承活動におい、担い手となる若い青年団員が中心となって賑やかに継承している点を高く評価した。